

# 地域活性化に向けて —かいぶつのたねプロジェクトを事例として—

小林直緒

## 1. 緒言

スポーツで地域活性化が成り立つのであろうか。そのような問いの一つ一つが十分な検証をされることなく、現在大規模なイベントに特化しない、地域に密着した観戦型イベントが急増している。これまでもスポーツによる地域活性化を担う事業者が、幾分独自に検討会を行っているものの、全国の事例を把握しきれていないのが現状である。今、こうしたスポーツを通じた地域活性化の在り方について、幅広く事例を調査・分析し、事業者モデルを確立することが求められていると言えるだろう<sup>1</sup>。

本研究は、スポーツを通じた地域活性化の在り方を明らかにするための、基礎研究として位置づけられる。そこで本研究では、長野県における『かいぶつのたねプロジェクト』のフィールドワークを基に、スポーツを通じた地域活性化の傾向を明らかにしてみたい。

こうした地域活性化プロジェクトの事例を一つ一つ検証していくことは、様々な地域に即した事業者モデルの確立を示唆するための格好の対象となると考えられる。スポーツにおける地域活性化プロジェクトを研究の対象とする本研究の意義は、この点にある。

本研究の先行研究としては、下記のもの挙げられる。

- 1) 平峯佑志、2017、『「スポーツ鬼ごっこ全国大会」における地域活性化への取り組み事例の考察』、地域活性学会研究大会論文集 9、pp. 318-321.
- 2) 成 耆政他、2012、『地域スポーツイベントの開催による地域活性化戦略の構築：「第3回塩尻ぶどうの郷ロードレース」のアンケート調査結果の分析』、地域総合研究 13(1)、pp. 73-94.
- 3) 矢口正武他、2009、『地域資源を活用した参加型スポーツ・イベントの可能性：長野県大町市におけるアウトドア・スポーツをケースとして』、地域活性学会研究大会論文集 1、pp. 89-92.

上記に挙げた研究は、未だ数少ない本研究の目的に合致した優れた先行研究である。し

---

<sup>1</sup> 成 耆政他、2012、『地域スポーツイベントの開催による地域活性化戦略の構築：「第3回塩尻ぶどうの郷ロードレース」のアンケート調査結果の分析』、地域総合研究 13(1)、p. 73.

かしながら、先述したように、やはり一つ一つの事例の紹介に留まっている。したがって、本研究では、地域活性化の本質を見据えつつ、スポーツを通じた地域活性化に対する貴重な一つの事例を提示することを課題とする。本研究で扱う長野県は、他の地域と比較してもスポーツが盛んで、地域密着度の濃い地域であると考えられることから、必ずや研究の発展的蓄積となるはずである。

## 2. 長野県におけるスポーツ推進計画

長野県においては、平成 25 年度から平成 29 年度、スポーツ推進計画が策定されている。基本目標については、下記の 6 つが挙げられている<sup>2</sup>。

- 1) 学校と地域における子どものスポーツ機会の充実
- 2) ライフステージに応じたスポーツ活動の推進
- 3) 住民が主体的に参画する地域のスポーツ環境の整備
- 4) 競技力向上に向けた選手強化、指導者要請の推進
- 5) スポーツ界における好循環の創出に向けたトップスポーツと地域におけるスポーツとの連携・協働の推進
- 6) 多面にわたるスポーツの果たす役割の活用

本研究で扱う長野県と全国を比較してみると、最も特徴的である点は、地域密着型プロスポーツチームが相次いで誕生しているという点である。野球においては、信濃グランセローズ、サッカーが最も影響力が高く、松本山鹿フットボールクラブ及び AC 長野パルセイロ、バスケットボールでは信州ブレイブウォリアーズ、バレーボールにおいても、ルートインホテルズブリリアントアリーズ及び VC 長野トライデンツが挙げられる。そのような中での課題として、トップレベルの選手の技術や経験を地域のスポーツクラブ等で生かしきれていないこと、引退後のセカンドキャリアに向けた計画的準備や支援不足が着目されている。これら課題を解決すれば、トップレベルの選手が地域のスポーツ指導者として活躍できる場を創出することができ、学業とのバランスや将来のキャリア形成にも配慮したジュニアアスリートへの支援も展開できることは想像に難くない。

---

<sup>2</sup> 長野県教育委員会ホームページより。

<http://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/sports-ka/sport/shinko/keikaku.html> 2017 年 9 月 28 日

ところで、長野県におけるスポーツ活動として、最も代表的なものと言えば、登山やトレッキング、サイクルスポーツなどのアウトドアスポーツを挙げることができるだろう。このように、長野県の地の利を生かしたアウトドアスポーツにおいての、参加型スポーツイベントに対する注目度は上昇しているように思われる。実際、親子で参加できるイベントとしては、登山クラブ、カヌーやカヤックの体験会、スキー、雪山キャンプ、カーリング等を見ることができる<sup>3</sup>。これらアウトドアスポーツが性別や年齢に関係なく、身近な活動になった理由の一つとして、スポーツ用品の進化がある。アウトドアスポーツはかつての登山家や冒険家のイメージを払拭し、軽量化と高機能化による携帯性と新素材の使用やプリント技術の向上によるファッション性が著しく向上し、そのことで購買層が多くなったことに起因する<sup>4</sup>。これら気軽なファッションに身を包み、週末は家族で過ごすという形態が他県に比して、実に多いという。実際に、私が長野県を幾度か訪れた際も、小学生以下の登山親子イベントに毎回遭遇することができたし、本稿を先取りすれば、プロジェクトを行った公園も、多くの家族で賑わいを見せていた。

このような現状でありながら、スポーツを通じた地域活性化が上手く機能していない理由は一体何なのであろうか。それは、種目や地域によって、指導者の確保が困難であるという理由から、『場』の創出が出来ていないことに他ならない<sup>5</sup>。これまで述べてきたような、長野県で展開されていたスポーツ振興計画も5年という期間を終えることとなるが、残念なことに一定の成果に留まっているようにも思える。

### 3. かいぶつのだねプロジェクト

そのような中、長野県において、2015年8月第1回かいぶつのだねフェスティバルが開催された。フェスティバルでは、農作物の重要性を伝える活動を通じて、信州産野菜の良さの再認識を促し、地域アイデンティティ形成に貢献することを目的とした。またアスリート引退後の地域での活躍する場を提供し、地域住民を巻き込んだ施策を展開している。かいぶつのだねプロジェクトの概要をまとめると以下のようになる<sup>6</sup>。

---

<sup>3</sup> 『いこーよ』等より <https://iko-yo.net/> 2017年9月28日

<sup>4</sup> 原田宗彦、2011、『スポーツイベントによる地域活性化』、Joyo ARC 43(496)、p. 7.

<sup>5</sup> 長野県教育委員会ホームページより。

<http://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/sports-ka/sport/shinko/keikaku.html> 2017年9月28日

<sup>6</sup> かいぶつのだねプロジェクト報告書より。

## 1) 地域ブランドの確立

- ・スポーツ教室の開催  
子どもの運動機会の創出  
未来のJリーガーの育成  
運動意識の定着・イメージ向上
- ・食育教室  
保護者への正しい食習慣の知識の教授  
地域の食文化への意識の向上
- ・地域食材 BBQ  
郷土愛の形成  
食文化の伝承  
生産者と消費者の交流

## 2) アスリートの就農支援

- ・スポーツ教室の開催  
自己価値の発揮  
生きがいの創出
- ・食育教室  
食材のPR  
販路の拡大
- ・地域食材 BBQ  
生産者との交流  
消費者との交流

以上のことから、子ども達の運動離れを防止し、心身の健康増進のきっかけづくりを行いつつ、アスリートのセカンドキャリアとしての活動場所の創出を期待できる。また親世代への食育による、食生活の改善や意識の向上による食文化の伝承、次世代の地域住民がイベント開催によって郷土愛を形成していくシステム作りにも着目している。

2015年8月に第1回かいぶつのだねフェスティバル in 菅平が開催され、128名の参加で盛会に終わっている。その後、2016年4月には第2回かいぶつのだねフェスティバル in 菅平が(75名)、同7月には第3回かいぶつのだねフェスティバル in 南長野(214名)が、同9月には第4回かいぶつのだねフェスティバル in 菅平(70名)が、同12月には第5回かいぶつのだねフェスティバル in 長野(102名)が開催されている。夏休みや冬休みは、比較的参加人数が多いという特徴はあるものの、全体として、多くの参加者が見られる傾向にある。運営メンバーは、元AC長野パルセイロ選手であった、本学出身の三橋亮太さん、同じく元ACパルセイロ選手であった土橋宏由樹さん、元ACパルセイロレディース選手であった橋浦さつきさんを中心として構成され、地元信州大学学生の滝澤宏樹さんも運営に関わっている。そのような、元プロサッカー選手を中心に活動してきた試みは、次第に数々のメディアでも取り上げられるようになり、新聞では下記のように紹介されている。

「スポーツや農業で地域活性化を図ろうと活動している長野市などの有志グループ『かいぶつのだねプロジェクト』は30日、野球やサッカーのスポーツ教室『かいぶつフェ

スティバル 2017』を同市篠ノ井中央公園で開いた。約 40 人の子ども達が訪れ、元プロ選手らと一緒にプレーを楽しんで汗をかいた。プロ野球オリックス元投手の甲斐拓哉さん、サッカーAC パルセイロ元選手の土橋宏由樹さんが参加。競技ごとに分かれて練習した。野球では甲斐さんが投げたボールを打ったり、ゴロを捕ったり。小学生は『バッティングが楽しかった。よくボールを見て打った』と話していた。サッカーでは、ドリブルを練習したり、ボールを二つ使って試合をしたりした。プロジェクトメンバーで AC 長野元選手の三橋亮太さんが企画し、グリーン長野農協（長野市）が協力した。練習後、参加者は地元産のレタスを使ったホットドッグなどを味わった。」<sup>7</sup>

以上の紙面を見てみると、これまで述べてきた長野県の地域活性化に向けて、一定の役割を果たす内容になっていることがわかる。

本稿では、第 6 回目のフェスティバルとなるイベントのフィールドワークを行った。

調査名称：かいぶつのだねフェスティバル～1日で足が速くなる！～

調査実施者：小林直緒：講師 梶孝之（尚美学園大学）

調査対象：長野県東部地区及び西部地区の子どもとその保護者

調査方法：講習実施後の聞き取り調査

調査日時：2017 年 5 月 20 日（土）、21 日（日）

参加人数：5 月 20 日（土）：26 名、5 月 21 日（日）：64 名

※人数は子どもの総数を指す。保護者に関しては、出入りがあったため、正確に算出することができなかった。

調査場所：5 月 20 日（土）菅平プリンスホテル、5 月 21 日（日）南長野運動公園

フェスティバルの概要は以下の通りとなる。

スポーツ教室においては、運動会での活躍を主眼に置いた『かけっこ教室』を行った。50 M を一人ずつ計 2 回測定し、1 回目と 2 回目の測定の間、フォーム修正を行い、記録の変化を記録証という形にして子ども達にフィードバックすることとした。自らのフォームに集中しやすいよう、一人ずつ 2 回の測定を行い、測定方法は陸上競技規則に則り、正確に行った。また 1 回目と 2 回目の体力的差異が見られないよう、十分な休息を

---

<sup>7</sup> 毎日新聞、『野球やサッカー 元プロ選手らと子どもがプレー』、2017 年 7 月 31 日、7 面。

とった。またアップ不足による記録の低下が見られないよう、どちらの測定も準備運動、スプリントドリルの実施、50Mの試走1本を行った<sup>8</sup>。その際、保護者は子どもと離れ、栄養指導（食育）を受講し、最後の測定の際に保護者が合流するというシステムをとった。その後、子ども、保護者、スタッフ、地元野菜生産者を交えて、BBQを行い、交流を深めた。

フィールドワークの結果、様々な様子を目にすることとなった。

第一に、スポーツ教室による子ども達の心身の成長である。2回にわたる50Mの測定は、実に93%の子どもがタイムを縮めることに成功した。子ども達の達成だけでなく、最後に合流した保護者達は、自らの子どもでなくとも、手を叩いて声をあげて応援し、教室は盛り上がりを見せていた。実際子ども達から、「ありがとう！速くなった！」という喜びの声や、「楽しかったー！」という声が口々に聞かれ、子ども達だけでなく、保護者からも「自分の子どもは足が遅いと思っていたけれど、すごく速くなって興奮したし、他の子ども達もどんどん速くなっていく姿に、思わず応援してしまいました。」という声を聞くことができた。また私からスタッフへの『なぜ、このイベントをやろうとしたのですか？』という問いに対しては、「自分も含めた長野の若者に良い影響を与えるようになりたい。」「金銭面も大変だとは思うけど、三橋さんの人望と地域の人が協力的だからクリアはできている。」と、スタッフに関しても地域との連携を密にしていることがわかった。さらに、2日目のイベントは公園で行っていたのであるが、そこには多くの家族連れが来ていた。イベントに参加していない家族が『僕もあれやりたい！』『今度やってみようか！』とイベントに参加しない人をも巻き込んだ心温まる光景がそこにはあった。

#### 4. 結

以上、長野県における『かいぶつのだねプロジェクト』は、以下のような変遷を辿っていたことが明らかとなった。

- 1) スポーツを通じて子ども達の運動機会の場が増加し、子どもの体力向上に寄与する。
- 2) スポーツを通じて達成感を得ることで、自発的な成長を促す。

---

<sup>8</sup> 梶孝之、2017、『大学体育実技における『達成』に関する研究—陸上競技を手がかりとして（2011-2016年）—』、尚美学園大学総合政策研究紀要 第29号、p.4.

- 3) 子どもから大人まで、多世代で楽しむイベントであり、食育教室によって食に対して正しい知識を身につけられる。
- 4) 全ての活動が終了した後に、全員で行う BBQ は、子ども達、保護者、地元食材生産者といった『信州』という地域的繋がりを豊かにする作用が認められた。
- 5) 元プロスポーツ選手が指導することによって、子ども達の目標となり、質の高い指導を受けることができる。それは、トップアスリート達のセカンドキャリアの創出とも言い換えることができよう。

以上の活動の検討から、スポーツを通じた地域活性化については、以下のように評価できる。

現在、地域活性化について、スポーツが大きな役割を果たすことができると脚光を浴びている。その一つ一つが十分な検討をなされることなく、単なるスポーツイベントとして終始されることも少なくない。しかしながら、私は今回のフィールドワークを行い、その地域活性化の試みは、必ずや成果を生むであろうという確信を持った。

複雑に入り組んだ現代社会にあって、地域課題が山積する中、一つのイベントを通じて子ども達が成長する姿は、一考に価する。そうした姿は、まさにスポーツを通じた地域活性化の成功の表象に他ならない。

以上のように、本稿では、フィールドワークを中心として、スポーツを通じた地域活性化について分析してきた。これによって、これまで事例報告に留まっていた地域活性化の実態を明らかにすることができた。このことから、スポーツを通じた地域活性化の在り方を明らかにするための基礎研究として、一定の成果を挙げたといっても良いであろう。しかしながら、地域による差異や、そうしたシステムの構築といった観点までは触れることができなかつた。それには膨大な事例の蓄積が必要となるからだ。今後の課題としたい。

## 参考文献

- 1) 平峯佑志、2017、『「スポーツ鬼ごっこ全国大会」における地域活性化への取り組み事例の考察』、地域活性学会研究大会論文集 9、pp. 318-321.
- 2) 成 耆政他、2012、『地域スポーツイベントの開催による地域活性化戦略の構築：「第3回塩尻ぶどうの郷ロードレース」のアンケート調査結果の分析』、地域総合研究 13(1)、pp. 73-94.
- 3) 矢口正武他、2009、『地域資源を活用した参加型スポーツ・イベントの可能性：長野県大町市におけるアウトドア・スポーツをケースとして』、地域活性学会研究大会論文集 1、pp. 89-92.

## キーワード

かいぶつのたねフェスティバル、地域活性化、スポーツ、長野県、かけっこ教室、食育、BBQ、セカンドキャリア、元プロスポーツ選手、地域密着

## 要約

本研究は、スポーツを通じた地域活性化の在り方を明らかにするための、基礎研究として位置づけられる。そこで本研究では、長野県における『かいぶつのたねプロジェクト』のフィールドワークを基に、スポーツを通じた地域活性化の傾向を明らかにした。こうした地域活性化プロジェクトの事例を一つ一つ検証していくことは、様々な地域に即した事業体モデルの確立を示唆するための格好の対象となると考えられる。スポーツにおける地域活性化プロジェクトを研究の対象とする本研究の意義はこの点にある。本研究では、地域活性化の本質を見据えつつ、スポーツを通じた地域活性化に対する貴重な一つの事例を提示することを課題とする。本研究で扱う長野県は、他の地域と比較してもスポーツが盛んで、地域密着度の濃い地域であると考えられることから、必ずや研究の発展的蓄積となるはずである。複雑に入り組んだ現代社会にあって、地域課題が山積する中、一つのイベントを通じて子ども達が成長する姿は、一考に価する。そうした姿は、まさにスポーツを通じた地域活性化の成功の表象に他ならない。